

千葉蓮華の咲く祭（その－２）

Hanamatsuri (in Aichi-prefecture) presents Lotus-treasury world

春日井 真 英*

Shin-ei KASUGAI

キーワード：蓮華蔵世界、陰陽五行思想、大土公神経、ザゼチ、蜂の巣、蓮

Key words : Lotus-treasury world (padhmagarbha-lokadhatu),

Yin-Yang and the five elements, Lotus, Beehive or Cellula as lotus

要約

これまでも論じてきたが、愛知県北設楽に伝わる「花祭」とよばれる民俗芸能は、単なる芸能という言葉では説明しきれない宗教的な深い意味合いを有する。しかも、それらが古い神話的要素、五行思想などから構成されている。この論文では、祭の「花」という言葉が古い仏教的「蓮華蔵思想」に繋がっていることを論じたものである。

Abstract

“Hanamatsuri (花祭)”, a traditional folk festival whose customs have handed down from generation to generation in Kitashitara, Aichi Prefecture, connotes religious meanings, mythological factors, and the Chinese doctrines of the Five Elements, among others. It is the purpose of this paper to consider the relationship between the word “flower (花)” in the festival and the Buddhist “Lotus-treasury” thought.

1. はじめに
2. 蓮華蔵世界の出現
3. 湯蓋・白蓋
4. 数に秘められた世界
5. ザンザあるいはザゼチについて
6. 舞庭に見えてくる世界

1. はじめに

先の論文^①では、『大土公神経』がいかに多くの仏教の根源に関わる問題を孕むものかを論じた。ところが、しばらく別の視点で花祭を見ているうちに花祭の世界がさらに広がってしまったのである^②。つまり花祭は蓮華蔵世界を顕現させている宗教的芸能だと言えるのである。ここでは、花祭の根底では、いかに仏教的な意識が関わっていたかを指摘し、その仏教的世界と花祭の世界の関わりを解析しようとするものである。先の論文でも触れた『大土公神経』を援用しながら論を進めることにする。

この『大土公神経』の祭文は五方位の神々を勧請するところから始まる。五方位とは、東西南北中央の事であり、花祭では常に問題となる方位である。

謹請東方二大土公神部類眷属（けんぞく）九億四万三千四百九十神等来臨、影向セシメ給フ
 謹請南方二大土公神部類眷属九億四万三千四百九十神等来臨、影向セシメ給フ
 謹請西方二大土公神部類眷属九億四万三千四百九十神等来臨、影向セシメ給フ
 謹請北方二大土公神部類眷属九億四万三千四百九十神等来臨、影向セシメ給フ
 謹請中央二大土公神部類眷属九億四万三千四百九十神等来臨、影向セシメ給フ

そして、この祭文は、土公神の眷属達を前に世界の来歴を説き起こすのである。さらに、五方位から勧請された土公神の眷属達の前で、呪師でもある花太夫が、彼らの由来を語り聞かせ、世界創世を語ると論じた。ここでは、更に、この世界創世の話を、『大土公神経』のイクバ出現の段から、わかりやすく改めながら引用し、論を進めたい。

イクバの吐く息から雲、霧、霞、風がうまれた。又、身体の毛は衆生草木となり、さらにその臍の中から千葉蓮華が生じたと説かれる。この「千葉蓮華」について大土公神経では「蓮華は散りて世界は国土となる。一つ百億、須彌百億、梵天百億、日月百億、鉄围山（ママ）、業火^{ごうか}百億（ママ）、大小諸神、三十三天皆ことごとく出生するところ也^③」。

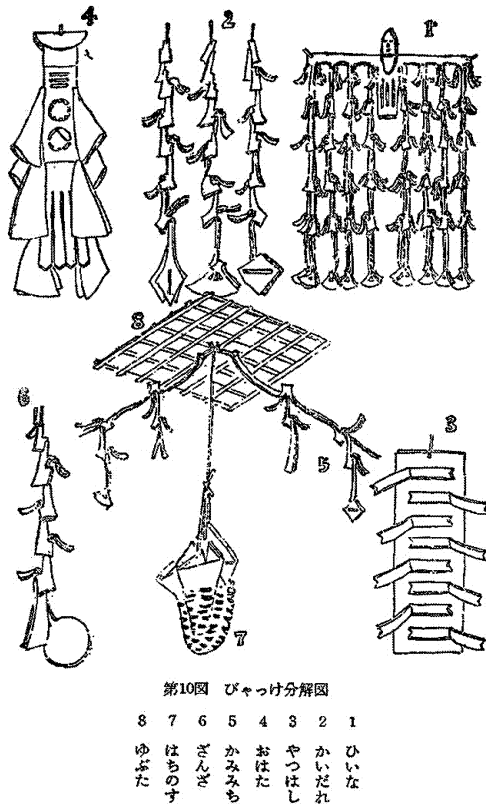
と、説いている。先の論文では、このイクバについては中国の盤古、リグ・ヴェーダに扱われているインドの原人（プルーシャ）に繋がる事が指摘されていると述べたが、視点を変えると、このイクバの身体から衆生草木が、その臍から千葉蓮華の生じる様は「盆網経」に見る「蓮華蔵世界」の記述と重なる。さらに、その根拠となるのが

蓮華は散りて世界は国土となる、一つ百億、須彌百億、梵天百億・・・

とする記述である。これは華嚴的世界観いや、毘盧遮那仏^④から生まれ出る「蓮華蔵世界」そのものなのである。だが、世界創世と言う視点から花祭を考えると基盤は更に広くなり、インド神話などとの関連性が問われることになる。とくにリグ・ヴェーダに出てくるヒランニャガルバ（黄金の胎）の考察は必要なものとなる^⑤。

2. 蓮華蔵世界の出現

花祭の「花」は舞庭に咲く蓮華であるとすでに説いた^⑥が、あらためて舞庭の飾り付け（荘厳）から考察してみたい。蓮華の象徴としての「ゆふた」あるいは「びゃっけ」の姿が、ここから見えてくることになる。



花祭では舞庭の飾りに、湯蓋あるいは白蓋に「蜂の巣」が用意されている。これだけでは理解できないかも知れないが、この「蜂の巣」は花祭の祭場、竈上の湯蓋あるいは白蓋という飾り物につり下げられている。この「蜂の巣」が、重要な意味を有するのである。土地の人々は、これを素直に「蜂の巣」と受け止めておられるが、「ハチス」が「蜂の巣」に転訛していったと見た方が「花」を考えるときには容易になる。つまり、「蜂の巣」は「ハチス」、「蓮華」の意であり、花祭の中で咲く「蓮華」と理解すべきものではなかったか、と考えるのである。このことは、「蜂の巣」が湯蓋もしくは白蓋に吊されるものであることを思慮すれば、納得できるものだといえる。ところで、湯蓋はまさに字義通りに竈の上、湯の上に来るべき装置と本来は考えるものだが、湯蓋と白蓋の意味が取り違えられていると、考えられることがある。これについては、すでに早川も指摘している^⑦。早川は湯

蓋について舞庭の中央に飾られる方形の天蓋様のもので、祭の中心とも考えられる重要なものである、と指摘した上で、

湯蓋は各種の祭具から集まり成ったもので、その構成は相当複雑であったが、次に述べる「びゃっけ」とほぼ同一で、一部を除くほかはただ大小精粗の別があるに過ぎぬから「びゃっけ」の条に説明する。

と記し

ちなみに湯蓋は、一般の立願により奉納するものも多く、それと主格のものとの区別は、製作の精粗と飾る位置とである。なお、奉納のものについては別に言うこととする。

と、している。続けて「びゃっけ」については

「びゃっけえ」また「びゃっかい」とも言う。びゃっかい（白蓋）が以前の称であるらしい。土地によるときんがさ（衣笠）とも言う。湯蓋が竈の正位天井に飾られるのに対して、これは多く竈と神座の中間天井に、湯蓋とわずかに間隔を置いて飾られる。また土地によると（大入系三沢・古真立等）方位類による東柱の傍らの場合もある。

「びゃっけ」の製作は一方湯蓋とともに、土地ごとに様式に相違があり、これが構成も複雑だから、かりに振草系古戸のものについて分解説明を試みる（早川-I、73頁）。

この記述の中で、大入系三沢・古真立の方位を考えてみる。花祭は実際の方位とは異なる方位観を有している（早川-I、68頁）。特に、大入は神座から見て右の柱を東と見立て、これを正位とする、とされているが。三沢の場合で左が正位、東とされているのを確認している。さらに、舞庭にある竈の焚口がもう一つの正位となり、花宿全体では方位が様々に入れ替わることになる。これは、儀式に伴ってのことだと考えられる。

さらに「びゃっけえ」と「びゃっかい」について早川の記述の中で、気になる事がある。それは「ひいな」についての記述である。

土地によって顔面等が明らかに現れたものもある。「ひいな」は五方位に飾る意味で、別に「びゃっけ」の中央にも吊されてある。なお、「ひいな」の呼称について、別に「ひいなごせ」とも言うから、雛御前の文字も考えられ、この地方の方言で同音のものに産児の産衣がある。（下線部、筆者）

と、する部分である。なぜ早川が、「ひいな」を産衣に絡めてきたのかは判らない。だが、この「産衣」という指摘は興味深いものである。それは、この「白蓋」の中心が新しい世界を生み出す処と祭文から読み取れる事と無関係ではないといえるからである。つまり、先に述べた「蜂の巣」の問題がここに絡むのである。繰り返すが、「蜂の巣」=「ハチノス」は「ハチス=蓮」であって、『大土公神経』に顕れるイクバの臍より咲き出てくる蓮華であり、それは同時に新しく生まれてくる赤子としての世界を迎え入れることを産衣としての「ひいな」が象徴していることになる。それ故に「白蓋」あるいは「蜂の巣」を有する「湯蓋」は世界創世の中心として機能することを顕しているのである。そのことは「湯の父」「湯の母」[®]と云う言葉を考えると、その持つ意

味は、さらに大きくなる。だが、早川は違う見方をしているように考えられる。「神の世継ぎとしてのみょうど」の考えを富山村大谷の熊野神社の御神楽に関連して次の様に記している⁹⁾。同所の言い伝えによると「みょうど」の由来を

はじめ熊野権現に立願して、宿った子供が成長十三歳に達した暁に御神楽の神事を勤め「生まれ清まり」の式を果たした者がすなわち「みょうど」であると言う。「生まれ清まり」の式は花祭りの場合をはじめ、この地方各所に行われていた御神楽と及び神楽に行われていた同名の行事と同一で、これを一に氏子入りの式とも言ったのであるが、ただ同所で言う立願により宿るとした点が他の土地とは異なるのである。しかして感応あって宿ったことの微は、何によって知るかということ、その点も未だ明確ではない。

早川は、この後「生まれ清まり」について御神楽の条で触れたからと概要を次の様に繰り返している。

式に遇う者に白の「ゆわぎ」を着せ、舞庭中央の竈の前（あるいは社殿前）に立たせ、「いち」と「おと」の二人が介添えに立って舞をするのであるが、その前に禰宜が湯立てをして、湯束ゆたぶきをもって釜の湯をその者の頭に濯ぎながら、神の子すなわち神の世継ぎとして生まれ変わる意味の歌を、楽に合わせて繰り返し唱えるのである。

この場合介添えとなる「いち」を一に湯の母、「おと」を湯の父といい、古くは湯浴みのことがあったとも言うが、今はそのことはただ湯立ての歌詞に残るだけである。

早川は、さらに続けて長野県地内の大川内（マ）（これは、長野県下伊那郡天龍村神原大河内のことであろう。ここの祭礼は一月五日に池大社で行われる）の事例、「みょうど」「みやご」について触れ、みょうどーみやごーうじこ と言う観念に触れようとしているが、

花祭を中心とした御神楽及び神楽の伝承によると、仏説のいわゆる何ら結縁ないものでもある定められた階梯を踏めば、その神子または世継ぎとして、新たに誕生の道はあったのである。かくして「みょうど」は村の人すなわち名なの人、さらに一個ひとの名として、神に斎き祭りをを行う者となるのである。

早川は、「生まれ清まり」と言う概念を村の中での身分の変化と捉えていると考えられる。だが、湯立ての意味、介添え役二人の名称についての考察はない。

3. 湯蓋・白蓋

あらためて、舞庭の飾り付けに関連して早川の記述に注目していくことにする。ここで注目

するのは、「ゆふた」あるいは「びゃっけ」と、そこに吊り下げられるものである。

早川を引用しながら考えてみる。

ゆふた。「びゃっけ」の本体である格子状の枠は多く竹で作られるが、これを「ゆふた」という。ゆふた（湯蓋）は「びゃっけ」と対立した同型のものの名であると同時に、この格子形の枠の名でもあった。枠の大きさは二尺八寸四方、枠骨は七本ずつを十字に組み合わせてある。土地によって、枠骨の数は五本ずつの場合もあり一定せぬが、大きさはほぼ同じである。大入系大入等では、以前は三尺八寸ほどもあったと言うから、これまた変遷があった様である。次に一方の湯蓋の枠であるが、これは「びゃっけ」を簡略にしたものだけに一般に小型で一尺二寸四方、枠骨は五本ずつの組み合わせであるが、土地によると三本の場合もある⁹⁾。

ところで、湯蓋、白蓋どちらに早川は重きがあると考えたのであろうか。この記述で見ると、「湯蓋」は「白蓋」を簡略化したものとなる。白蓋は、本来湯蓋ではなく迎えた神の頭上に捧げるものであろうと考えるのだが、ここでは地区ごとの湯蓋と白蓋について表を造ってみる。

	白蓋	湯蓋
小林	五色 竈と神座の間に	白・竈の上 御幡は四方に蜂の巣
御園	竈と太鼓の中間 ザンザとザセチ、かいだれ	竈の上にザンザ 中央にひいな
東園目	なし	五色・ザセチ四方に 蜂の巣5個（神鬼が火をはねた後に落とす）
月	なし	大湯蓋 五色・白の片・両ミクシ 八つ橋が上から張られている
下栗代	なし	八つ橋を四隅に 片ミクシ・両ミクシを上部に張る
足込	なし	竈の上に 五色
河内 (神道花)	なし	大湯蓋・蜂の巣 白色 戸数分の小湯蓋
中設楽 (神道花)	湯立て神事を別に行う	大湯蓋 白色 ザセチを上部に張る 蜂の巣
中在家	色のひいなを竈の前に吊す 蜂の巣	白ひいなとも言う 竈の上に吊す
古戸	なし	湯蓋
布川	なし	湯蓋（添え花にも「蜂の巣」）
坂宇場	なし	中に日光月光
下黒川	五色・四隅に八つ橋	白の八つ橋で囲ってある
上黒川	湯蓋より小型か？	なし
津具	なし	なし

【この表は筆者の調査と『古よりの花祭 受け継ぎし技と形』（東栄町）を参考としている】

このように表に纏めて気がついたことがある。それは「湯蓋」「白蓋」の分布であり、さらに祭の道具の寸法である。早川は「湯蓋」「白蓋」の枠の大きさについて変遷があったのでは、と考えている。筆者は祭具（祭に用いられる幣束など）の寸法の数字に強い関心を持っている。花祭に触れ始めた頃は、何もかもが不思議で、魅力的な対象だった。祭に携わっている人々、宮人、花太夫の方々につきまとうように話を聞かせていただき、御幣の長さ、お供え物の数など、実にいろいろなことを拝聴した。その中でも気になったのは御幣の寸法であった。「一尺二寸ぐらいかな？」とか「これは二尺四寸だ」などと言われたのだが、何故そのような寸法になるのかを聴くと、必ずと言っていいほど「なんでか、わからんの～」と返ってきた。メートル法に変わってからも、基本的には全て尺貫法の単位で記憶されていた。ここには微妙な問題が潜んでいたと考えられる。曲尺による記憶、その数値は実は祭の背景を考察するには欠かせない象徴と考えられる。曲尺による採寸は、昔ながらの基本でありながら、祭に関連する重要な意味を伝えていたことになる。理由は明確でなくても、あるいは理由が分からなくても、この寸法による数値は、祭の中で重要な基準として機能していたことになる。ただ一人だけ意味を理解している者がいれはすむだけのことである。つまり、それだけ禰宜あるいは花太夫の任は重かったことになる。このことは下津具の舞庭に竈がないと記されていた事とも関連するのも知れない（早川-I、79頁）。だが、平成20年（2008）には、簡易式の竈（？）らしいものが舞庭の中央に置かれていた。

ここで問題としたいのは申の長さ、さらには幣束全体の長さの間に微妙な誤差が見えることである。しかし、それは備品と完成品の差であり、どちらかで基準が遵守されていれば問題はないとする立場なのであろう。だから、おおよそであるが幣の申の部分の長さが一尺二寸、一尺八寸、二尺八寸、三尺三寸程と理解されてきたことである。完成して、同じ長さになっても基本の寸法は守られている事になる。今では、メートル法が用いられているが、そのため数値に秘められた意味が伝わらなくなっている。花祭は、この数字に注目するだけでも興味深い世界が広がってくるのである。早川の著書には採寸された御幣などのスケッチがいくつかある^⑩。だが、この採寸も問題を含んでいる。筆者は弊申のみの長さを意識していたが、幣束全体の長さについての記述が多い事である。その結果として、実際の申の長さよりも、二～三寸の誤差が生じてくる。しかしこれも許容範囲に含まれることになろう。

4. 数に秘められた世界

これら不確定な要素があるのだが、これらの採寸を数字に置き換えてみる。それぞれ一尺二寸は12、一尺八寸は18と読み換えて見ることにする。

【一尺二寸】12、つまり十二月。一年の月数、十二支、十二処、十二神将、十二縁起

【一尺八寸】18、十八界^⑪、十八変^⑫、十八物^⑬、十八羅漢（これは十六羅漢もある）

【二尺二寸】22、これは仏教の教えを受
ける資質を意味する「根¹⁵」
に通じ、悟りの世界への促
しがある。

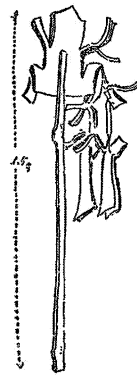
【二尺八寸】28、二十八宿¹⁶、二十八部
衆¹⁷などこの舞庭の世界の
構成と、舞庭を守護する者
たちが象徴的に配置されて
いることが、暗示されてい
るといえる。

【三尺三寸】33、三十三天¹⁸さらには観

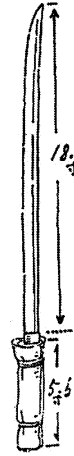
音の問題が秘められているのと、考えられる。

97 四 儀式的行事

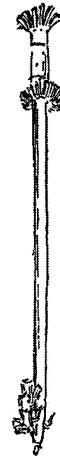
83 三 祭場と祭具



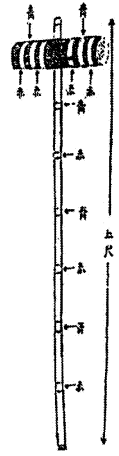
第23図
「はらい簪」の一種
(振草系足込)



第21図 「ふるま」の一種
(振草系足込)



第20図 「やちごま」の一種
(大入系下津具)



寸法の問題、いや、祭具に用いられる道具の寸法、あるいはその数値に触れておきたい。特に天^{あま}の祭、あるいは棟祭では七十五の膳を供える¹⁹。このことは花祭に出会った頃から、気になっていた。この七十五膳という数は現在の新城市海老地区の三月二十一日の祭の時にも出会った事があるが、ここでは小さな小枝を丸めて束ねたのを見せられ、「これが七十五膳の箸」と聞かされ、印象に残っている。この七十五という数値が何処から来たのかというと花祭関係者からは、明確な解答を伺っていない、厳密には判らないようだ。だが、筆者がこれまで論じてきた様に、この祭の背景に五方位を基盤に持つ陰陽五行の視点を含む宇宙生成、あるいは世界生成という意図が秘められていると見ていけば、七十五という数を陰陽五行の立場から解析していける可能性がある。そのことは吉野裕子が『陰陽五行と日本の文化²⁰』の序で触れていることに繋がる。

吉野は

私どもにとって重要なことは、祖先達が何を信じ、何を基準として生きていたか、その精神生活の中心を求めることである。昔を知ることは古人がその拠としていた処を視ることなので、それにはまず、時を遡行して古人の側らに近づくことが先決で、現在の位置に居座って、今の心で合理的な解釈とか推測を加えるべきではない。

古人が信を寄せていた処とは、あるいは祖先に対する篤い信仰、あるいは外から寄り来る神に対する畏敬の念、などが考えられて来た。しかし私見によれば、それと並んで、時にはそれらに優って古人が心を寄せていたものは、中国の古代哲学、易と五行思想であった。と、指摘する。筆者はこの考え方に同意したい。それは、花祭の場合にも十分当てはまるからである。五方位を重視するこの祭の根底を考えれば五行思想がいかに満ちあふれているか判ってくる。ところで、陰陽五行思想によると宇宙を象徴する数は<五十五>だとされる²¹。つまり陰陽

五行の思想の背景にある理論では太極から、分かれてきたものが五十五と言う数で象徴されると言う。筆者は、この五十五に五行配当表^②に見る五行（木・火・土・金・水）、五色（青・赤・黄・白・黒）、五方（東・南・中央・西・北）、五時（春・夏・土用・秋・冬）を付け加えて七十五と見たい。それは、宇宙が五通りに分類されているからであり、五行配当表に見るものの中でも、これらが基本と考えることができるからである。それ故に、七十五の依って立つ根拠は重大である。この七十五膳の問題は、岡山の吉備津神社を始めとして各地に存在している。ノートルダム清心女子大学の奥村貴子氏によると全国で四十二例に及ぶという^③。もちろん、花祭の中で行われている七十五膳の供え物についての記述はある。また、長沢利明氏は私論として七十五という数の由来を説明されているが、陰陽道の陽数としての五に五を掛けてそれを三倍する事によって得られるとされている。この数七十五は、春夏秋冬に土用を足し数、一年を五で割った数、各季節の平均の日数は七十二であるが、閏の年など七十五になることもある。つまり、ごく大まかに一年の一つの季節の日数に相当すると理解できる。この話は「大土公神経^④」の後半部分で盤固大王と千歳福与女の間でできた五人の子供達による領土（領日）争いを門前博士が調停するところと関連する。始めに生まれた四人の王子達は一年を三月づつ領有し、そのうちの十八日を各王子が五郎の姫宮に分けあたえると言う案を出す。これによって、一年に四度の土用が生まれることになり、この五人のお子達の治める時期は平等ということになる。だが、五人の王子達の子供の数が問題となる。五人の王子達が領有する日数が定まった後の段で、おのおのの子供の数が述べられている。

太郎の王子（春三月）^{しょうたいしゅうりゅうおう}青体青竜王（東方甲乙寅卯の方）…… 十人

次郎の王子（夏三月）^{しゃくたいしゃくりゅうおう}赤体赤竜王（南方丙丁巳午の方）…… 十二人

三郎の王子（秋三月）^{びやくたいびやくりゅうおう}白体白竜王（西方庚辛申酉の方）…… 十二人

四郎の王子（冬三月）^{こくたいこくりゅうおう}黒体黒竜王（北方壬癸亥子の方）…… 九人

五郎の姫宮。四人の王子の領有する三月より終わりの十八日づつを分けてもらい土用として領有する。また、閏月の話もここには出てくる。この^{わうたいりゅうおう}黄体竜王は七十五人の子供がいるとされる^⑤。

五郎の姫宮の七十五人を考えてみると基本的に人間に対する災厄＝厄神とすることができる。かといって、邪神として対応することのできない存在であろう。つまり、厄神として別格で扱わざるをえないことになる。長野県天龍村の大河内の春の例祭に見る「厄神送り^⑥」はこれに該当するのかも知れない。そこで藁で編んだコシキを二段にし、その中央に柳で白紙の幣束を立て、二十三本の色紙のスズ竹の幣束をコシキに挿すと記されている。ただし『池大神社氏子総代 年中行事』ではスズ竹は 25 本、二尺二寸。柳の新芽二尺四寸を一つ、尺二寸を二つと記している。

また花祭が終了し鎮めの行われるときに、一升枡にお米を満たし。そこに荒神幣を五本立て、典座役に下されるが（地域によって、行っていない処もある）。この荒神幣の串の長さ、及び禰宜・宮人の持つ祓幣の串の長さも問題になるところである。幾人かの関係者の方から伺った話を纏めてみると

古戸は 祓い幣の串の長さは 一尺二寸、荒神幣は 一尺五寸

中設楽 太夫しか持たないが 九寸 鎮めは（榊） 九寸

七十五膳 一尺八寸

辻固めの際 つとに刺す幣束は一尺二寸、その元には一尺五寸

高峰祭、滝払い、湯立て、釜祓い各祓いに用いるものは九寸

小林 杉もしくは檜の細い角材一尺二寸のもの。

同時に一尺五寸のものもあるという。

ただお尋ねした方の手元には資料がなく、担当者は宮人だけど地区外在住のため不明。

月 串は檜（各自専用のもの）一尺ほど（ただし幣を付けると一尺二寸ほど）

布川 祓幣の長さは、串の部分で一尺二寸である。

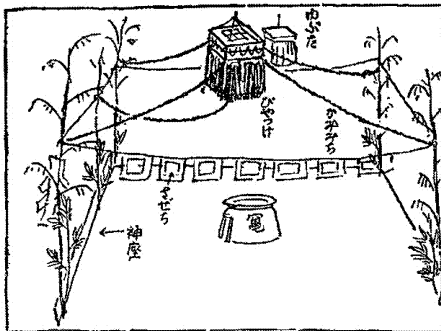
串は、必ずしも竹串とは限らず、杉あるいは檜材を使用しているところもある。だが、素材よりも、これらの数字の背景には無視できない領域の存在を見て取ることができる。そこには、陰陽五行の世界の陽数の意識、あるいは曆上の数値を当てはめていくことができるが、これらの数値の問題は、たまたま偶然に一致しただけかも知れない。だが、北設楽郡全体あるいは三信遠地方の祭礼を眺めてみれば、この地域に陰陽五行思想が祭に取り込まれていることは否定できない。もちろん、これまで触れてきた御幣の問題は、単なる御幣として、祓いのためのみに存在しているのではなく、陰陽五行あるいは仏教思想の中の世界生成を展開させるための呪術的道具として、祭りの執行と密接に関係していることは言うまでもない。しかし、それらを何処まで聞き取れるか、あるいは宮人の方々がどのように意識されているかを確認することは現在では難しいと言える。明治期の廃仏毀釈、昭和期の大戦、山村部から都市部への人口の移動（社会構造の変化）、それらを契機として人々の意識は微妙に変化し、祭礼の形骸化が進んでいった事を指摘することはできよう。だが、まだかろうじて祭の花とも目される舞のダイナミックな動きは若い人を中心に残っている、またそれに関心を持つ人々も増えては来ている様に見受けられる。しかし、一昼夜を通して責任を全うしていくことは高齢者には苦痛なこととなっている事実もある。つまり、ここには世代交代の問題が潜んでいるのだが、この過程の中で微妙な変化が兆していると考えられる。祭の内なる世界を掌握されている方が少なくなっていることは大きな問題でもある。

5. ザンザあるいはザゼチについて

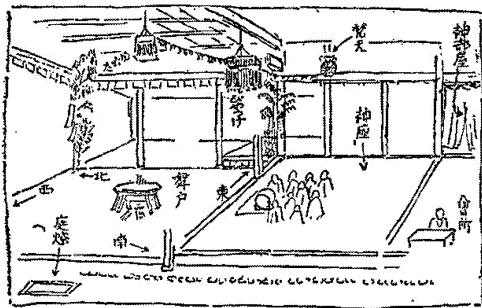
この段階でもう一つ注目したものは花祭の舞庭を飾る切り草のザゼチ（白紙半紙に絵形を切り抜いたもの、これを神座、舞庭のしめ縄に吊す）に切られる「日・月」あるいは日＝太陽そして月であった。小林地区の湯蓋の上にかぶせるザンザ（白紙半紙を横に四つ折りにしたもの）である。さらに、地区によって微妙に異なるザゼチの絵型である。早川は土地によってそれぞれ技巧が異なり、通常六種とし、七種または八種の場合もあるとしている（早川-I、71頁）。また並べ方についても古戸の例を挙げて触れている。小林では絵柄としては「社」「駒形」「日月」、それに「埴山姫之命」、「匂々廻馳之命」、「金山彦命」、「軻遇突智之命」、「水速女之命」、「大日大聖不動明王」、「水天魔王」の文字がザゼチに彫られている。これらの絵形は舞庭の持つ聖性を象徴し、さらにその聖性の由来を五行の神々で顕し、祭に秘められている舞庭の意味が示されているのである。そのことはこの論文の前編^⑥で扱っているため、ここでは触れないが、このザゼチの暗示する世界も興味深い。このザゼチ類の並ぶ順序も地域によって異なり、湯蓋と白蓋同様に本来の意味が取り違えられていたり、混乱していると考えられるところもある^⑦。たとえば、湯蓋が五色であるべきかもしれないのだが、びゃっけ（白蓋）はその名前の通り「白」であるべきものと理解したい。

現在の状況を比較しながら舞庭考えてみることにする。

この、祭が行われる舞庭が神聖な場所であることは様々な手順などから伺うことはできる。また、幣などにも、その聖性を示すいくつかの問題が出てくるのである。つまり、湯蓋と白蓋の意味づけである。早川孝太郎の舞庭の図-第13（早川-I、78頁）を見ても、そのことは判る。図には、明確に湯蓋と白蓋を図示しているからである。しかも、振草系（早川の第13図）では、湯蓋は小さめに、そして白蓋の方が大きく造られている。また、この白蓋から神道などが曳かれている。もちろん、大入系の早川の第14図では湯蓋から、白蓋に神道（？）が曳かれていること



第13図 舞戸飾付け（振草系）



第14図 舞戸飾付けを中心として（大入系）

は判るが、そこから四方の忌み竹に曳かれているかまでは見て取れない。つまり、湯蓋は、まさに湯の蓋であった。前にも指摘したが、湯とは始原の海の象徴だと筆者は解釈している。この始原の海は、花祭の花太夫がこの舞庭に臍から生じる蓮華を咲かすためのに設置するものであり、そこで執り行う世界再生という呪術的行為に繋がっているのである。このことについてはすでに述べているのでここでは触れないでおく。

早川の第13図^⑧では白蓋から神道などが曳かれているが、ここでは「蜂の巣」が、「湯蓋」にあるのか、「白蓋」なのかは判らない。だが本来「蜂の巣」は白蓋に吊り下げられていることになる。また第14図を三沢だと仮定すれば舞庭の四方に東西南北の忌み竹に百綱が曳かれる構図になるのだが、大入系三沢地区は、現在休止中でその詳細を再検討できない状態である。また、同じく間黒も休止中であり微妙な飾り付けについては検討できないことになる。ところで、早川は神社で行われる古真立と津具の事例について興味深い記述を残している^⑨。それは神社で催される例として、古真立と津具に付いてである。参考までに引用しておく。

なおこの際、神社を祭場とする土地の舞庭の概略を言ってみると、前とたいした変化はないが、古真立の場合竈の傍らに、別に榺のやや大なる幹が一本立っていて、これが中央の意でもあった。そしてこの榺の枝々には、五色の弊が下がっている。一方、下津具では竈はなくこの榺のみである。それには五色の布が吹き流しになって、中央に円鏡が飾ってある。この点が異なっていたのである。ちなみに下津具に竈がないのは、明治初年以降のことで、当時、代々の禰宜屋敷に世継がなく、養子をしたために湯立てを行うことができず、やむなく廃したと言っているがこれは表面のことで裏面には別の理由もあったようである。

この記述で、面白いのは榺を立てることである。長野県天龍村の大河内の冬祭り^⑩（例大祭）では、舞庭の中央に大入系式の竈が用意されるが宮人達が集う背後に榺が立てられ、そこに様々な白色の切り草、ひいなが下がっていることである。ただ、早川が記したように五色ではないことに注目したい。

さて、「湯蓋」「白蓋」の表からも見て取れるように白蓋は忘れられる傾向にあると言える。もちろん、湯蓋と白蓋が混同されているところもあると言える。つまり、月、古戸、布川、坂宇場の事例である。ここに廃仏毀釈の問題が絡んだ可能性も否定できない。その理由は、中設楽が北設楽では廃仏毀釈の中心地的存在であり、中設楽の禰宜が率先して動いたと言う事を中設楽の竹内正純氏から御教示を受けたからでもある。だが、中設楽では別に湯立てを行う事に対応したように思慮できる。人々の視線を外して密やかに行われたことはいつ頃からのことであるのか興味深い。

6. 舞庭に見えてくる世界

くりかえすことになるが花宿全体が浄化される。古戸ではそこへ白山権現からの花太夫、禰宜、宮人らを迎え入れる。だが彼らが白山権現に籠もり、そこから下ってくることから、もはや通常の者ではなくなっている。現在とは全く異質の意味が、そこにあったことを理解しておかなくてはならない。それは山頂に籠もる事が特別な意味、特別な意図の元で行われていたからである。つまり、浄土を山頂に顕現させ、その浄土の花を迎え入れることになるのだが、このことは彼らが山頂で浄土を擬似的体験していたことを意味するのである。その一行を迎えることによって花宿の持つ意味が大きく変化することは明白であろう。浄土の花をここに移植する、言い換えれば新しい世界がここにもたらされることになるのである。だからこそ、舞庭は宇宙全体の縮図として意味づけられ、語られていかななくてはならないのである。それゆえに、花祭で用いられる一つ一つの祭具には、それなりの意味が秘められ、それなりの役割、機能が与えられていると筆者は考えている。つまり祭を取り仕切る花太夫の責任の重大さが、そこにある。筆者は、これまで述べてきた「花祭」の一連の流れの中から「湯蓋」、また「白蓋」と多くの「添え花」などは、一つ一つを単独に見ていくのではなく、「再生」あるいは「生まれ清（浄）まり」という目的を果たそうとする祭を、執行するための必然的な宗教的装置と理解していくのである。そして、これまでに触れてきたように花祭が「蓮華蔵世界」を構築している見るならば、舞庭の天井に飾られる「湯蓋」、「白蓋」そして志のあるものが提供する「添え花」は、宇宙全体で開花した蓮華の世界



写真は布川の舞庭・右に湯蓋、中央に繋がる切り草（黄色）がある。

として舞庭の観客達を癒やすことになろう。それがすでに別稿[※]で触れている「大宝蓮華」の開花になり、来世における救済が『花のほんげん祭文』[※]に連なることになる。つまりザゼチに囲まれた舞庭と言うマイクロコスモスから宇宙全体を見渡すというパースペクティブ的な視野をもたらしてくれる。祭の参加者達は湯竈と、その上に眼を遣ることで湯蓋・白蓋が湯気の中で朦朧と揺れる姿に始原的神話の世界再生の場を垣間見ることができるのである。

===== 註 =====

- ①拙論「千葉蓮華の咲く祭（その一）」北設楽の花祭を考える 『言語・文学・文化』東海学園大学 第12号（通算）71号）19～28 平成25年
- ②拙論「花祭祭文（北設楽・霜月神楽）に見る蓮華蔵世界について」 印度学仏教学研究 第62巻第1号 日本印度学佛教学会 平成25年
そこで、『大土公神経』の内容を、「華厳経」、「盆網経」から論じ、花祭の舞庭の飾り付けの内容が蓮華蔵世界と結びつくことを論じた。
- ③武井正弘編『奥三河花祭祭文集』岩田書院 史料叢刊4 2010年 214～215頁
- ④「華厳思想」に基づく仏教的世界を示す。しかし、「蓮華蔵海」とは記されていない。そのことは「盆網経」で論じられている世界観に近いのかも知れない。
- ⑤『大土公神経』の祭文の冒頭で五方位の神々を勧請する記述があると述べたが、詳しく述べると、この次に記されているのが鳥の飼い子（卵の黄身）のようなものから天地に分かれると記されている。これは、日本書紀、古事記の同様な宇宙創成の始まりなのであるが、インドのヒランニャガルバ（黄金の胎）を意識したと見ることも否定できない。蓮華蔵世界、ヴィシュヌを意識していたと見れば、リグ・ヴェーダに見る「原人賛歌」に繋がっていく事になる。
- ⑥このことは②を参照されたい。
- ⑦早川-I、76～79頁「祭場に要する祭具」で触れているが、「湯蓋」を中央竈の上に吊す事、その構造が複雑であることと、指摘している。「白蓋」は『古よりの花祭 受け継ぎし枝と形』（東栄町 平成24年 監修・文 山本宏務）
- ⑧「湯立て口伝（その一）」振草系中在家 早川-I、449～451頁、
湯立て釜祓い（ママ）の口伝の中で、湯の父、湯の母が湯本へ渡る様を唄っている。注目すべき処は、庭なかに七つ釜立て沸かず湯は、御ぜさにめいせば（ママ）こをりひやみず、と記している処であり、さらに小供（ママ）を連れていっているところである。また、大人系津具の「湯立て口伝（その二）」前掲書451～452頁でも、湯の父、湯の母が唄われている
こちらでは二人の丈が七尺袖が六尺と唄われるが、子供の記述はない。
- ⑨前掲書 352～354頁
- ⑩前掲書 74頁
- ⑪前掲書 97頁 図23小林の祓い弊の一種 などである。
- ⑫仏教用語。眼・耳・鼻・舌・意の六根とその対象となる式・香・味・触・法の六境と六根と六境を認識する眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六識のことを言う。併せて十八界。
- ⑬仏菩薩が定に入って行かう十八種の変化
- ⑭大乘の僧尼が常に身に備えるべき十八種の具。
- ⑮「根」を意味する。『望月仏教大辞典』（昭和八年）平成元年（十刷）による。また、人間をさとりに促していくもの。すなわち、信・精進・念・定・慧の五根に基づく能力 中村元『仏教語大辞典』東京書籍出版 昭和五十五年
- ⑯星座を四方向で七つに分けて考える占星術。インド占星術や その流れを汲む宿曜道では、二十八宿と同

様の二十七宿を用いている。詳しいことは触れないが、二十七宿を用いるのが正しいとする説もある。

⑰千手観音の眷属の数を意味する。

⑱仏教の世界観に現れる天界の一種。須弥山（しゆみせん）の頂上には、帝釈天（インドラ）を統領とする33種の神が住んでいる。中央に帝釈天、四方に各8天があるので、合計33天となる。一種の楽園として描かれている。釈尊の母が死後ここに生まれたため、釈尊が彼女に説法するため一時ここに昇り、帰りに三道宝階によって地上へ降ったといわれる。この事は、花祭りの湯蓋、白蓋に「八つ橋」が存在することの意味を考える上でも興味深いものである。

⑲（早川-I、109～110頁）

⑳吉野裕子『陰陽五行と日本の文化』大和書房2004（2003）

㉑吉野裕子 前掲書 22頁。五十五とは（1+2+3+4+5=15）の生数と（6+7+8+9+10=40）の成数の和からなるという。

㉒吉野裕子 前掲書 30頁

㉓長沢利明「民俗学の散歩道 6 七十五膳の神饌」『西郊民俗談話会』2010年4月

ただし奥村貴子論文（1995：1996）は未見。ただし、高橋晋一氏の「平八幡神社祭礼について」『阿波学会紀要』第50号2004の註2には全国20カ所と奥村貴子（1995）の調査を引いている。更に同氏は「吉野川市山川町川田・八幡神社例祭における特殊神饌」『阿波学会紀要』第58号2012の162頁では奥村貴子「七十五膳据神事の研究（上）」『岡山民俗』203（1995）の6頁を引き、全国で四十例あまりと記している。この数の変動は調査の進捗状況を暗示するものと考えたい。（ただし、筆者未見である）また、高橋氏は七十五膳の意味を齋藤ミチ子氏の「多膳形態の諸相—七十五膳について」『國學院大學日本文化研究所紀要』35-6 1999を引き、「豊富な品数を盛り沢山にした供膳」と同義と捉えるのが妥当であろうとする齋藤氏の見解を受け入れている。（筆者未見）

㉔前掲書『奥三河花祭文集』217～227頁

㉕前掲書 226～227頁 文中より引用しておく。

1. 大災 2. 大上グン 3. サイオン^{(大)ママ} 4. サイトク 5. サイロン 6. サキャウ 7. サイバン
8. サイセツ 9. 王バン 10. ヒョビ 11. 天火^{てんか} 12. 地火^{ちか} 13. ハフウ 14. 羅刹^{らせつ} 15. ワウモウ
16. ジッシ 17. ヒッシテ 18. ヤキャウ 19. 年ノ金神 20. 月ノ金神 21. 日ノ金神 22. 時ノ金神
23. 天モウ 24. 千チャウ 25. ヒロク 26. サンセツ 27. 年ノケンジキ 28. 月ノ下食^{げじき} 29. 日ノ下食
30. 時ノ下食 31. タイクワ 32. 老若 33. 滅門 34. 咎神^{とがじん} 35. サスカミ 36. ウンクワ 37.
ライクワ 38. シュクワ 39. クホツ 40. テンカ 41. メツ日 42. ホロフ日 43. チンモン 44. ジ
モン日 45. 八専日^{はつせんひ} 46. テンス日 47. ゼス日 48. キンロウ日 49. ヤスイ日 50. 長短日^{ちやうたんひ} 51. リ
ウク日 52. シッテウ日 53. クロ日 54. ロクジャ日^{みなこれ} 皆是なり（番号は筆者）

つまり、実数は合わない。

㉖旧暦三月三日に行われる。シシボイ（シカウチともいう）際に厄神送りが行われる。ただ、この神の神輿は、神社下のお堂の前の置かれ、それからお堂の脇の「神の腰掛け石」に移され、鉦、太鼓の音で送られる。かつては神送り場まで担がれていったそうだが、今では軽トラックになっている。厄神送りについては天龍村教育委員会編『南信濃／天龍村 大河内の民俗』信濃路 昭和48年 92～93頁。

㉗拙論、註①

- ⑳早川-I、75～79頁の間に見る、湯蓋、白蓋の説明及び祭場の飾り付けによると、すでに「ゆふた」と「びゃっけ」の役割が混同している節があることを見て取れる。また、次の註㉑で示した早川の舞庭飾り付けの図13は（振草系）と記されているにもかかわらず、場所は明白ではない。また、第14図の大入系を筆者は三沢山内であろうとしたが、左右の逆転が覗えるのである。早川は77頁で、振草系の飾りについて触れているが、筆者が表に纏めた様に振草系では、三カ所（振草系は十一カ所）にしかないことになる。この表は、筆者の調査及び『古よりの花祭 受け継ぎし技と形』（東栄町 平成24年監修・文 山本宏務）を参考とした。
- ㉑この図は、早川孝太郎全集第I 七八頁のものである。第14図の大入系のものは三沢山内のものと思慮される。
- ㉒早川-I、79頁 神社を祭場とせる場合で触れている。
- ㉓1月5日に池大社で行われる。ここでは面形はない。
- ㉔拙論 前掲書「花祭（北設楽）の祭文から見えてくる世界——大宝蓮華の花咲く世界——」『東海仏教』第58輯 平成25年）
- ㉕『花のほんげん祭文』早川-I、432～437頁